

企画展 「現代美術レジデンスプログラム 林武史 石の記憶、泥の声」

会 期：2020 年 9 月 19 日（土）～10 月 25 日（日） 〈32 日間〉

会 場：企画展示室、美術工芸展示室、敷地内の森

展示点数：30 点

観 覧 料：無料

入場者数：1,782 人



【内容】

1988 年から 10 年続いた「美濃加茂彫刻シンポジウム」を通じて、美濃加茂市は作家がこの地で制作した彫刻の在る「清流と彫刻のまち」になりました。この流れと考え方を引き継ぎ、「芸術と自然」を開館のテーマとして 2000 年に美濃加茂市民ミュージアムは開館しました。以後現代美術家を毎年招き、滞在制作と展覧会を開催してきました。開館 20 周年の今年は、現代日本の彫刻界を代表する岐阜県出身の彫刻家・林武史（1956 年～）を紹介しました。

林は長年、石を用いた壮大な彫刻作品を発表し続けています。2000 年頃からは土や泥を使い、山や田をモチーフとする「彫刻」を手がけるようになります。大地の歴史が刻まれた石、そして人の営みを支え続ける土。自然の風景と時の流れに息づくように、地に根を下ろして生き続ける林の彫刻は、遺跡や日本の暮らしの原風景を彷彿とさせます。本展では、室内には木曽川の石と泥土を用いて当地で制作した《水田—美濃加茂》、白川のアトリエで制作した《光の沼》を中心に、小品やドローイングを展覧しました。森では、泥の山を作るワークショップ「月に吠える」を開催し、2019 年度に寄贈を受けた野外彫刻《舞の所作》など大型の石彫を展示しました。

林の彫刻に息づく造形の美と土着の精神は、人間の意識の奥底に眠る自然との交わりの記憶を目覚めさせます。このような作品の在り様は地元の歴史を掘り起こし、五感を刺激し、新たな文化の創造を目指す地域ミュージアムとして当館が理想とする姿にも重なります。石の記憶をたどるように、泥の声を聞くように、五感を澄ませて林武史の世界との対話をお楽しみいただけたことと思います。

【関連事業】

□ワークショップ 「月に吠える」 全て参加料：無料 講師：林武史氏

1：「日干しレンガを作ろう」8 月 22 日（土）民具展示館東の石畳

① 9:00～10:30 ②15:00～17:00 参加者：30 名

2：「山を作る」9 月 19 日（土）ひのき広場

①10:00～11:30 ②15:00～17:00 参加者：52 名

3：「月に吠える」10 月 3 日（土）ひのき広場

18:00～20:00 参加者：20 名

□ミュージアムトーク

10 月 3 日（土）14:00～15:00

講 師：林武史氏

会 場：企画展示室・美術工芸展示室

参加者：17 名

□バスツアー「林武史のアトリエ見学」

10 月 10 日（土）13:00～16:30

講 師：林武史氏

行 先：笹平高原（岐阜県加茂郡白川町）

参加料：100 円

参加者：9 名

【新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった事業】

○日干しレンガを作ろう 8月2日（日）

【刊行物】

『林武史 石の記憶、泥の声』パンフレット A4 判 6 頁 無料配布

【展示品】

	作品名	サイズ[H×W×D] (cm)	制作年	技法・材質	所蔵者
1	無題	88.0×62.0	1994 年	ジェッソ、鉛筆、墨、紙	作家蔵
2	無題	88.0×62.0	1994 年	ジェッソ、鉛筆、墨、紙	館蔵
3	無題	88.0×62.0	1994 年	ジェッソ、鉛筆、墨、紙	館蔵
4	光の沼	46.5×681.0×657.0	2020 年	黒御影石、赤御影石	作家蔵
5	赤い山 一	9.0×14.0×14.0	2018 年	赤花崗岩、漆	作家蔵
6	赤い山 二	12.5×13.0×12.5	2018 年	赤花崗岩、漆	作家蔵
7	赤い山 三	10.0×14.0×11.5	2018 年	赤花崗岩、漆	作家蔵
8	赤い山 四	10.0×14.0×12.5	2018 年	赤花崗岩、漆	作家蔵
9	赤い山 五	11.5×13.0×12.0	2018 年	赤花崗岩、漆	作家蔵
10	金華山	8.0×18.0×12.0	2018 年	ブロンズ、漆	作家蔵
11	黒い山 一（うち）	10.3×16.5×13.0	2018 年	黒花崗岩、漆	作家蔵
12	黒い山 二（そと）	11.0×14.0×13.0	2018 年	黒花崗岩、漆	作家蔵
13	黒い山 二（へり）	13.0×18.0×12.0	2018 年	黒花崗岩、漆	作家蔵
14	Untitled 93-01	100.0×71.5	1993 年	墨、コンテ、アクリル、紙	作家蔵
15	Untitled 93-02	100.0×71.5	1993 年	墨、コンテ、アクリル、紙	作家蔵
16	Untitled 93-03	100.0×71.5	1993 年	墨、コンテ、アクリル、紙	作家蔵
17	白い山 1	54.0×67.0	2015 年	リトグラフ、紙	個人蔵
18	白い山 2	54.0×67.0	2015 年	リトグラフ、紙	個人蔵
19	白い山 3	54.0×67.0	2015 年	リトグラフ、紙	個人蔵
20	山のかたち 青	56.0×49.0	2020 年	ボールペン、紙	館蔵
21	山のかたち 黒	49.0×56.0	2020 年	ボールペン、紙	作家蔵
22	山のかたち 赤	56.0×49.0	2020 年	ボールペン、紙	館蔵
23	蟬のためのドローイング 青	56.0×49.0	2020 年	ボールペン、紙	作家蔵
24	蟬のためのドローイング 赤	56.0×49.0	2020 年	ボールペン、紙	作家蔵
25	桜蟬	23.8×8.2×6.5	2020 年	木（サクラ）	作家蔵
26	水田—美濃加茂	48.0×501.0×862.0	2020 年	泥土、石 和紙、スタイロホーム	作家蔵
27	15 の蟬の声	27.0×524.0×27.0	2015 年	石	柳ヶ瀬画廊
28	舞の所作	178.0×212.0×833.0	1991 年	黒花崗岩	館蔵
29	水鏡	41.0×226.0×384.0	2020 年	安山岩	西濃建設株式会社
30	月に吠える	180.0×490.0×290.0	2020 年	泥土	館蔵

【参考】

展覧会に向けて作家は、泥で山をつくる一連のワークショップ「月に吠える」とミュージアムでの作品制作を並行して行った。8月から約1か月の間、美濃加茂市民ミュージアムにたびたび来訪し、民具展示館東側の石畳で No. 26《水田—美濃加茂》を制作した。二列ならんだ石のうち、北側の一列には美濃加茂市内にかつてあった石畳に使われていた木曽川の石、南側の一列には白川の石をそれぞれ使った。《光の沼》は白川のアトリエで制作したものである。どちらも搬入後、展示会場でインスタレーションとして完成させた美濃加茂と白川で作品をしている間、常に蟬の声を聴きながら制作していたという。そこで蟬にまつわる立体作品やドローイングを中心に、近年制作している山のシリーズの小品などを壁面に展示した。

関連企画としては泥で日干しレンガを作り、積み上げて山を作るワークショップを開催した。小さな子供、親子、大人たちのべ80人ほどが参加した。10月3日に開催した「月に吠える」では参加者がその山に登って、自分の思いを月に向かって叫ぶイベントを行った。作品はそのままの姿で残した。



〔写真1 光の沼〕



〔写真2 水田—美濃加茂〕



〔写真3 滞在制作〕



〔写真4 ワークショップ 山を作る〕



〔写真5 舞の所作 移設作業 〕



〔写真6 バスツアー 笹平高原にて〕

【アンケート結果】（全 129 枚・複数回答あり）

選択設問から

① 展示を見て今の気分は

・心が安らいだ	74
・心がざわざわした	11
・心が躍った	17
・力強さを感じた	33
・美しいと感じた	41
・驚いた	14
・怖いと感じた	4
・不思議な世界だ	43
・悲しくなった	0
・わけがわからなかった	8
・ずっと見ていたい	17
・見なくても良かった	1
・その他	9
計	272

② 展示を見て思ったこと

・こういう表現があるんだ	69
・作家の発想は豊かだ	53
・とても気になる作品があった	25
・作家のことを知りたくなった	24
・作家の意図するものがほとんどわからない	10
・素材や作り方に興味を持った	56
・特異な空間を楽しめた	63
・自分の考え方には合わないと感じた	3
・自分の固定概念が崩れた	15
・スケール感に圧倒された	13
・その他	10
計	341

③ 発想・発展

・日ごろの色々な事を忘れることができた	26
・自然のことを考えた	74
・誰かに話したくなった	26
・時間や歴史について思いをはせた	27
・自分の暮らしについて思いをはせた	17
・作品から何かを連想した	37
・思い出す情景があった	38
・現代美術への関心が高まった	24
・世界の平和を少し考えた	5
・何かを作ったり、表現したくなった	24
・もう一度見たいと思った	21
・作家の他の作品も見たいと思った	28
・その他	4
計	351

自由記述から

- ・わからないけど、想像してタイトルを考えて楽しかった。
- ・石の作品で素晴らしい創造ができることに感心しました。
- ・脳にとっても刺激を受ける感じがしました。

- ・16 番目の蟬になりたい。
- ・共感できるものがたくさんありました。
- ・林さんの呼吸が伝わりました。
- ・抽象表現の良さを知った。
- ・自然を主材とした表現豊かかつ力強い表現がおもしろい。
- ・発想の原点が不明。
- ・岐阜のことがもっと知りたくなった。なぜセミ??
- ・岐阜の自然を楽しみたいと思いました。
- ・非常に心地よい空間で心がいやされました。
- ・ART FAIR 東京の東京画廊で、「金華山」を見てから、岐阜県内で作品展があれば見たいと思っていたので、見ることでよかったです。
- ・田植えを思い出した。石や土の力を感じた。
- ・壁の展示でしようがないけど、コンセントが気になった。
- ・民家と作品の関係が反撥しながらも調和していた。
- ・アンケートの内容がおもしろかった。いつも興味深い内容でいい。
- ・文化の森の展示は、テーマが斬新でよいと思います。身近にすごい芸術家がいることを知ることが出来ました。どうもありがとうございました。
- ・次は昼間に来ます。
- ・心が安らぐのは、この会場のおかげかもしれません。作品と会場が、よくマッチしている感じがした。
- ・15 の蟬の声が気に入りました。
- ・自然の物を自然で表現するおもしろさを感じた。
- ・遠くから見たら、違うものが見えた。
- ・作家の意図の説明があるとよい。(作品)
- ・自然になじんでいて、とてもよかったです。
- ・自然環境にマッチした作風がとても美しいと感じた。
- ・こんな彫刻もあるのかと勉強になった。
- ・石や土に興味が出てきました。ステキな作品をたくさん見ることが出来て楽しかったです。
- ・石や土だけでこんな空間が作り出されていて、すごいと思った。
- ・自然に返るという意味の作品を見て、考えの幅が広まりました。
- ・何からインスピレーションを受けたのかは理解できたし、私にもかわらの石が好きなので、作品にしたい気持ちもわかった。でも、何を伝えたいか意図がわからない。
- ・文化の森でのアーティスト インレジデンスの企画を、毎年とても楽しみにしています。
- ・良い展覧会です。
- ・泥の作品 右の石の並んだ所は、庭師さんの面を合わせて、整然と律した感じが好き。
- ・床の作品 入ってすぐの石の作品。つくばいや生活の中の一部の美しい形を思い出したり、水たまりの美しさを感じたりしました。
- ・大型の作品もさることながら、壁に取り付けられた立体作品も、かがんで見るという行為が伴って、作品の見え方が変わるところがおもしろい。
- ・ユニークな作品でよかった。
- ・林先生のように自然と在る作家さんのスタイルがとても好きです。優しさを感じました。
- ・戸内の(展示室) 石のインスタレーションの下が「土」であると良かったです。
- ・迫力に充ちていた。